

# 札幌市中小企業振興審議会

## 会 議 録

日時：平成21年12月25日（金）

場所：STV北2条ビル6階 第1～3号会議室

## 1. 開会

事務局（角田経済企画課長） それでは定刻となりましたので、まだ3名ほど委員の方お見えになっておりませんが、ただいまより札幌市中小企業振興審議会を開催させていただきたいと思っております。私、経済局で経済企画課長をしております角田でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、年末の大変お忙しい中ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。大変恐縮ではございますが、座って進めさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

本日は、16名の委員の方にご出席をいただいております。なお、菊嶋委員、水澤委員、田村委員につきましては、本日所用のため、欠席とのご連絡をいただいております。

次に、配布させていただいております資料の確認でございますけれども、本日は事前に皆様にお送りいたしました資料を使って、ご審議させていただきたいと思っております。もし足りない資料がございましたら、事務局の方にお知らせいただきたいと思います。

資料は4点でございます。1点目は、「札幌市産業の現状分析 資料集」、それから2点目が「札幌市産業振興ビジョン策定に係る基礎調査 アンケート調査報告書」、3点目が「札幌市産業振興ビジョンの全体構成（案）」、4点目が「札幌市産業振興ビジョン骨子（案）」となっております。

もしお手元に資料が揃っていない方がいらっしゃいましたら、事務局の方までお知らせいただきたいと思います。

それでは、これより後の議事運営につきましては、小林会長の方にお願ひしたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 2. 議事

小林会長 それでは、早速、議事に入らせていただきます。

本日の議題は、まず一つは「札幌市産業の現状について」、それと「札幌市産業振興ビジョンの骨子（案）」について」となっております。

では、事務局の方からこの2つについて説明をお願いします。

皆様からのご意見、ご質問につきましては、説明が終了した後にお受けしたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

事務局（角田経済企画課長） それでは、私の方からご説明をさせていただきたいと思います。

まず、「札幌市産業の現状分析 資料集」についてご説明させていただきたいと思います。皆様の方に事前に配布させていただいておりますので、すでにお目通しいただいているかと思っておりますので、データ自体は全部非常に重要なデータでございますけれども、本日は私の方から特徴的な部分についてのみ、ご説明をさせていただきたいと思っております。

お開きいただきまして1ページ目でございます。「 経済成長の経緯・景気の動向」で

ございますが、これは1ページから2ページにわたってデータを掲載しております。まず、上の方でございますけれども、これは札幌市の人口と市内総生産額ということで、これは以前もご説明申し上げましたが、人口増加に伴って市内の総生産額が増加しているということです。ちなみに、12月1日現在の札幌市の人口でございますけれども、1,905,353人ということで、190万を若干上回っているところでございます。続きまして、下の方のグラフでございますけれども、これは全国の開発予算に占める北海道開発事業費ということで、実は平成15年までは、だいたい国家予算の10%が北海道開発事業費ということで予算化されておりましたが、その後10%を切って、平成21年度には8%というふうになっております。北海道の人口が全国の5%であるのに対し、開発予算は従来10%程度の開発予算が配分されていたのが、だんだん減少してきているというところでございます。

続きまして、3ページ目ですが、こちらから11ページまでにわたって、人口についてのデータをまとめさせていただいております。まず3ページ目の上でございますが、札幌市の人口減少の今後の推移ですけれども、平成32年以降、人口が減少していくというふうに推計されております。下の方の表にいきますと、北海道との比較におきましては、道が全国ペースと札幌のペースをかなり上回る勢いで減少していきまして、平成17年から47年の30年間で北海道人口は120万人減少するというふうに見込まれております。

続きまして、5ページをお開きいただきたいと思っております。これが前回の審議会でも色々ご意見をいただいたところでございますが、生産年齢人口の推移ということで、札幌市、北海道、それから札幌広域都市圏と3つ並んでございますけれども、いずれにいたしましても、黄色い部分の生産年齢人口が今後減少していき、一方で赤い部分の高齢者人口が増加していくという推計でございます。

次の6ページ下の方でございますが、全人口に占める女性の割合ということで、これが非常に特徴的なデータかと思っておりますが、札幌市が左から2番目でございますが、全人口に占める52.7%が女性、特に生産年齢人口の15歳から64歳が36.5%ということで、政令指定都市の中では生産年齢人口の女性の人口比率が最も高いという特徴でございます。

続きまして、7ページでございますけれども、7、8ページの両方が、道外・道内それぞれの転入・転出でございます。前回ご意見を色々いただきまして、年齢別の資料提供というご意見もございましたので、8ページ目の方にご用意させていただいております。7ページ目の下の方からいきますと、札幌市と道外との転出・転入者数の推移でございますけれども、青い棒グラフが転出、緑の棒グラフが転入ということで、一目瞭然、転出が非常に多いということで、特に男性の三角形ですね。青の三角形と緑の三角形がどんどん開いていっているということでございまして、これは転出が多くて転入が減ってきているということで、転出超過がどんどん増えていっているという状況でございます。

今の統計を年齢別で分析したのが8ページ目でございますが、特に下の方の札幌市内から道外への転出超過というところでございますけれども、20歳から24歳と25歳から29歳の年齢層が非常に多く、かつ増えているというのが非常に大きな問題と私どもは考えて

おります。人数で申し上げますと、20代の転出超過数が5,570名、全年代合計で9,296名ですので、転出超過の約6割が20代で占めており、そしてどんどん増加しているという、私どもとしては非常に厳しい状況というふうに分析をいたしております。

続きまして9ページでございますが、こちらの方は転出前後の産業別就業割合でございますが、札幌市内から道外への転出が、下のグラフでございますけれども、特徴的なのは製造業でございます。転出前は、転出者全体の10%が製造業に就いていましたが、転出後は約2倍の19.3%ということで、転出前は製造業以外の職業に就かれていた方が、転出後は道外で製造業に就かれているという結果になっております。

続きまして、10ページでございますけれども、10ページは札幌広域都市圏の通勤状況でございます。通勤の流入と流出、両方のデータを入れておりまして、いずれもだいたい7%が通勤流入・流出しているということでございます。特に右側の方に、割合をのせていますが、流入・流出ともに上位が江別、石狩、北広島ということで、ここで半分以上を占めています。特に流出数は、札幌から江別、石狩、北広島への流出が増えております。石狩は流入より流出の方が多いということで、これはやはり周辺の企業立地、石狩地区や江別地区の企業立地が進んできて、札幌から周辺の方に通勤をする人が増えているというデータでございます。

続きまして11ページでございますけれども、有業率ということで、これは継続的な職業を持っている人の割合ですけれども、この特徴的なものが上のグラフの札幌市でございます。赤い線が、女性でございます、札幌は46.0となっております。先程女性の労働力人口が政令市の中で札幌が一番多いとご説明をさせていただきましたが、データ上では有業率は、政令市の中で決して高くはないという結果でございます。

続きまして、12ページから産業特性ということで、札幌の産業の構造等についてデータ分析をさせていただいております。12ページは従業員別、資本金別の規模ということで、これはもうすでに審議会でも何度もご議論いただいておりますが、中小企業が9割以上、従業者数、資本金にしても9割以上というデータでございます。

そして13ページが、産業別従業者数、事業所数でございますけれども、事業所数、従業者数ともに、第3次産業が中心で、第2次、特に製造業が少ないという構造になっております。事業所数におきましては、製造業は全国の約3分の1、従業者数におきましては3分の1以下ということで、やはり全国、道に比べても第3次産業中心の経済構造になっているということでございます。

それから15ページですが、総生産額で見ても、やはり札幌は製造業が4.8%ということで、全国の4分の1以下、道の2分の1以下ということで、事業所数、従業者数、そして総生産額いずれを見ましても、第3次産業中心の産業構造というふうになっているところでございます。

それから飛びまして、21ページでございます。これが北海道の域際収支でございます。これも何度もご議論いただいておりますが、北海道の域際収支につきまして、1兆5,000

億の赤字ということでございまして、特に製造業の移輸入超過が顕著でございます。

22 ページの方は札幌市でございますが、札幌市の場合は道内との取引が多いので、移出超過になっておりますが、しかしながらやはり製造業の部門ではマイナスというふうになっております。

また、23 ページが一人あたりの市民所得ですが、政令指定都市中最下位という非常に残念な結果となっております。

それから 24 ページ以降 53 ページまでが都市機能ということで、札幌の気候はじめ、インフラ、社会資本整備状況ということでございますけれども、24、25 ページにつきましては、札幌はやはり台風、地震といった被害が比較的少ないというデータでございます。

それから 26 ページでございますが、こちらは北海道・札幌のビジネスコストということで、上段の方が札幌エリアのオフィスビルの坪単価で、東京の約 3 分の 1 でございます。それから下の方が土地でございますが、これは東京の 10 分の 1 以下ということで、こういったビジネスコストは首都圏などに比べると非常に低いということでございます。

次に、27 ページからは物流と人の輸送の関係になっておりますが、27 ページ下の方の北海道の航空輸送の推移ですけれども、ここで特徴的なのが国際線の実績が多くなっているということで、5 年間に輸送実績が約倍増しているということでございます。これは海外の路線が増えたとか、観光客が増えたということが背景にあるかと思えます。

それから 30 ページは航空貨物、31 ページは船舶の物流でございます。30 ページの方の航空貨物につきましては、棒グラフで示す国際輸送が減少ということになっております。一方、貨物船舶輸送でございますけれども、これは海外貿易の実績で申し上げますと、31 ページの上のグラフのように増えております。やはり苫小牧の比率が非常に多く、全体の貿易量の 84.5% が苫小牧、小樽が約 6.3% というふうになっております。

次に、32 ページから 36 ページまでは食の関係のデータです。32 ページの上段の方は食料自給率のグラフでして、全国が 40% であるのに対し、北海道は 198% と食料基地としての北海道でございますが、一方で農家数の推移というのを 33 ページで見ますと、北海道内の農家につきましては、平成 2 年から 17 年までの 15 年間で約 4 割減少しているという状況でございます。

次に 35 ページにいきますと、特徴的な部分でございますけれども、北海道の漁業・養殖業生産量、それから加工品でございますけれども、両方とも全国 1 位のシェアなのですが、漁業・養殖業生産量は 26% である一方、加工品が 19% ということで、やはり獲れる量に比較して、加工の量が下回っているということでございますので、加工付加価値を高める部分で、やはりこれは北海道内で対応していない部分があるのではないかと推測しております。

それから飛びまして、38、39 ページでございますが、商店街、NPO 法人の概要ということで、この商店街の数で見ますと、非常に減少しております。平成 10 年以降 10 年間で、商店街で 2 割減、商店街の店舗数で 35% の減ということで、地域の商店街というのは減少

していています。その一方で、NPO 法人数というのが非常に伸びております。こういったことから、商店街振興といわゆるコミュニティビジネスといったようなものを今後活用した地域経済の活性化というのも一つ検討していく必要があると思っております。

次の 40 ページにつきましては、学術関係の機関の一覧を載せております。

それから 43 ページからは、観光客の推移ということでございます。上段が北海道・札幌の観光客数の推移ということで、青が札幌なのですが、だいたい北海道の観光客の 3 割程度が札幌に観光で来られるということでございます。その一方、下の方の円グラフでございませけれども、北海道観光客の道内客、道外客の割合は圧倒的に道内が多く、道内の方が色々と動いて観光されるということです。それから、札幌観光におきましても、実は道外客よりも道内客の方が多いということで、こういった道内の人たちの動きを活発化する、そして海外を含め道外からもっともっと観光客を呼び込むことによって、人の動きが活発になって経済が活性化されるのではないかと考えております。

それから、続きまして、45 ページから文化関係、イベント関係の資料を載せてございます。49 ページをお開きいただきたいと思いますが、札幌ドームの入場者数ということで、平成 13 年に札幌ドームがオープンいたしましたけれども、平成 16 年に日本ハムが北海道に来ましてから、プロ野球の観客が非常に伸びているということで、こういったことも含め、プロスポーツを活用したスポーツ関連産業といったものを、こういったデータを活用して振興していく策が必要ではないかと考えております。

ただ一方で、50 ページにございますが、スキー場のリフト利用者数というのが少なくなってございまして、やはり北海道ならではの、ウィンタースポーツに代表されるスキー人口がだんだん減ってきており、平成 10 年から 10 年間で 4 割減となっております。プロスポーツが活性化されている一方で、雪という北海道の資源を活用したウィンタースポーツが衰退しているということで、こういったウィンタースポーツの活性化によって、経済の振興を図ることができるのではないかと考えております。

それから 51 ページ以降は札幌のイメージということで、52 ページをお開きいただきたいと思いますが、52 ページの下の方の札幌のイメージというところで申し上げますと、一番折れ線グラフの数値が高くなっているのは平成 21 年の 28.9%で、やはり食でございます。それから 2 番目に多いのは、自然・景観、次に観光スポットということで、そういった食資源、観光資源をやはりここで十分経済に活用していく必要があるというふうに分析をしております。

53 ページの方は、ブランド力ということで、常に札幌は地域ブランド調査で上位を占めているというところでございます。

次に、簡単にアンケートの方も、引き続きポイントだけご説明をさせていただきたいと思っております。アンケートにつきましては、道内の札幌広域都市圏企業向けのアンケートと、道外企業向けのアンケートと 2 種類出しております。道内向け広域圏につきましては、10,000 社中 2,325 社で 23.25%の回答率、道外につきましては 1,000 社に対して 145 社で

14.5%の回答率でございます。

まず、4ページでございますけれども、こちらは道内、特に札幌の広域都市圏の企業でございますが、直近5年における業績の推移ということで、67%がやはり減少傾向ということで、非常に厳しい状況になっているという結果でございます。

それから少し飛んでいただきまして、8、9ページでございますが、これも道内の広域都市圏の企業でございますけれども、問4上の、道外に発注している企業に対する問いでございますけれども、道外発注の取引理由ということで、1番目が道内では調達できないものがあるから、2番目が道内でも調達可能だが品質・価格等の面で問題があるからということで、特に2番目につきましては、こういったことをクリアすれば、道内の需要の循環が図れるのではないかと分析しているところでございます。

次に9ページは、今後の事業展開に係る基本的な方向性についての問いですが、市場規模の将来展望というところで、「拡大していく」もしくは「変わらない」というのが54%でございますが、一方で、「縮小していく」という企業が33%というような状況でございます。

それから10ページでございますけれども、「問6、今後の対応」ということで、今後一番力を入れていくのは、営業力の強化ということでございますので、すでに色々と行政として営業力強化の支援もやっておりますけれども、こういったところをさらに強化していく必要があるのかと考えております。

それから13ページでございますけれども、札幌周辺の企業で今後の新分野への取り組み状況ということで、現在新分野への取り組みを「行っている」、「取り組む計画がある」、「取り組む意向がある」というものを含めると46%、約半数が何らかの形で新たな分野に取り組んでいく予定をしている、あるいは意向を持っているという結果でございます。

それから少し飛んでいただきまして、18、19ページでございます。新しい分野に進出するにあたって活かせるものは何かということで、18ページで既存の技術やノウハウを84%の企業の方が今後も活かしていけると回答しており、19ページの方はどういった点を活かすかということで、やはり既存事業から得たノウハウ、従来得た技術やノウハウを使って新しい分野に進出していくという意向や計画を持っているところが多いというところでございます。

20ページでございますけれども、特に新しい分野に取り組む予定がないというところでございますけれども、その原因、理由として、「資金力の不足」と「特に必要性を感じていない」というアンケート結果が出ております。

それから時間もございませんので、道外企業の方を説明させていただきたいと思っております。道外企業につきましては、32ページからでございます。先程の道内と同じように、直近5年における業績の推移ということで、道外では46%が減少ということで、一方道内企業では先程ご説明しましたとおり67%ですので、道内企業のほうが減少傾向が強いということでございます。

それから33ページの間4以降は、北海道に対する色々なことを質問しておりますが、北

海道の特徴はということかと聞いておりますが、1番は「流通コストがかかる」、それから2番目に多いのは「地価が高い」、3番目に「自然・気候などの周辺環境が悪い」というアンケート結果でございます。自然環境・気候というのは、観光にとっては非常に資源になるという一方で、企業の進出にとっては雪害のイメージがあるかと思いますが、マイナスの要素となっているという結果だと思えます。

それから35ページでございますけれども、以前に札幌広域都市圏に事業所を持っていて撤退した企業に対しての問いでございますけれども、撤退理由というのが、「取引先・連携先が遠い」「市場規模が小さい」が多くなっており、その他ということで、「事業見直しなど社内事情」「会社の事情」によるものというのもありました。それから問6の1の北海道の事業所開設予定ということで、83%の企業が特に予定はしていないというところでございます。

それからアンケートの最後でございますが、36、37ページでございますけれども、36ページの下、問6-3でございますけれども、特に北海道に進出しない理由としては、「営業エリア外」「関連会社にて対応する」「業務戦略上必要なし」などが多い理由で、社内的な戦略、会社の運営方針、経営方針の中で進出はしないということです。右側へいきますと、公的支援として税制面での優遇措置というのを求めたいというような結果が出ているところでございます。

以上、駆け足ではございましたが、現在の私どものデータの集計とアンケートの集計結果でございます。

引き続き、データに基づいて分析をしました結果、お手元にお配りしております「札幌市産業振興ビジョンの全体構成(案)」というのを、再度私どもの方で練り直しました。これは前回ご審議いただいた内容を踏まえまして、今回のデータとアンケート調査結果を基に、事務局の方で色々と議論をして、再度練り直しさせていただいた案でございます。前回ご提示させていただいた案と変更した部分についてのみ、ご説明をさせていただきたいと思えます。

まず、第1章でございますけれども、「ビジョンの位置づけ」というところに変更を加えました。1点目が、上から3つ目の「札幌市中小企業振興条例に基づく総合的な施策とする」ということで、これは前回の審議会でもやはり条例の主旨をきちんと踏まえてビジョンを作成すべきだというご意見をいただきましたので、これを盛り込ませていただきました。

一方、前回のビジョンの位置づけの中には、「ビジョンを経済構造の変化が生じた場合は改定する」ということで書かせていただきましたが、前回の審議会のご意見の中で、ビジョンの運用体制として審議会をはじめ、あるいはいろいろな意見を聞いてこれを管理し、さらに見直しも行っていくべきだろうというご意見をいただきましたので、第6章というのを設けまして、第6章でしっかりとビジョン策定後の運用体制と見直しにつきましても明記させていただきたいと思っております。

次に、第2章を若干変更させていただきました。ここも前回、現状分析と課題がわかり

にくかったところがありましたので、きちんと整理をさせていただきました。現状分析の1番目は「経済成長の経緯」ということで、過去、札幌・北海道がどういった経緯をたどって経済成長してきたか、人口増加と公共事業といったようなことを先程触れさせていただきましたが、そういったことをまとめさせていただきました。2つ目としましては「人口動向」として人口減少、少子高齢化、そして道外への流出といったような分析を行っております。3つ目としましては「産業特性」として第3次産業中心の現在の産業構造であることを示しています。4つ目としましては「都市機能」として札幌には色々なインフラ、社会資本が整備されている中で、こういったものが十分活用されているのかどうかといった分析でございます。

そこで課題といたしまして、まず1番目としては「人口減少と少子高齢化の進展」、2つ目「人材の流出と雇用情勢の悪化」、3つ目「製造業をはじめとしたものづくり産業の脆弱性」、4つ目「都市機能の強みの活用不足」ということを、この分析から課題として抽出をさせていただきました。

そして、第5章が一番大きな今後のポイントになるかと思いますが、ここをもう一度私どもの方で議論を重ねて練り直させていただきました。前回のご審議の中で、ものづくりだけの取り組みだけではなくて、あらゆる産業に対して取り組んでいくべきではないかという多数の委員の皆様からのご意見をいただきました。私どもとしましては、当初の案でも決してものづくりだけを強化していくのではなく、あらゆる経済政策をとっていく中で特にエンジンとしてものづくりを強化して行って、それが第3次産業を引っ張っていくというような構図を考えていたのですが、私どもの説明が十分ではございませんでしたし、資料も産業別に記述をしておりましたので、今回書き直しをして、よりわかりやすくさせていただきます。

「1.施策展開の方向性」といたしまして、「(1)社会情勢の変化に対応する」ということで、この部分につきましては、好むと好まざるとどんどん進んでいる社会情勢の変化、人口減少、少子高齢化、グローバル化、地球環境問題、こういったものに対して札幌市、行政としてどう経済振興の中で取り組んでいくのかを明記させていただきました。

(2)は前回ご議論いただいたところなのですが、ここは産業別に支援、取り組みをするのではなく、事象別にまとめさせていただきました。例えば1番目は、「豊富な北海道の食資源」を活用して産業振興をしていくということで、これは食ですので第1次産業から加工・製造の第2次産業、そして流通・小売といった第3次産業、それぞれに通じる経済政策ということで考えております。以降、同じような考え方を作っております。2つ目の「北海道・札幌の魅力を活かした観光」。第1次から第2次、第3次すべてに通じる取り組みでございますし、先程申しましたプロスポーツ、そして雪国のウィンタースポーツといったものを活用した産業振興、そして文化芸術、Kitara など、各種施設やイベントを活用する産業振興、そして積雪寒冷地技術、教育機関、研究機関等の知の集積、こういったものを活かすということです。例えば前回ご議論いただきました建設業につきましても、一つの

ご提案ですけれども、積雪寒冷地技術というのは当然、建築・土木で優れた技術を北海道・札幌は持っておりますので、そういったものを活用して、例えば海外に技術移転をするとか、そういった中で行政はどういう役割を果たしていくのかといったことを、ここできちんと明記できると思いますので、前回ご議論いただいたように、色々な産業分野についての取り組みをここできちんと明記をしていきたいと考えております。北海道・札幌らしさを活かしたバイオテクノロジー、IT、コンテンツ、これらはいわゆる新産業と言われておりますが、ここに書かれております通り、こういったものを活用して産業振興を図るということです。

そして(3)として、「中小企業の経営基盤強化と創業の促進」ということで、これも先程データ分析ございました通り、札幌の9割以上を占める中小企業を対象にあらゆる分野の中小企業の人材育成、人材活用、各種相談、こういったものを行政として取り組んでいかなければならないということを書かせていただきたいと思います。

そして、2番目、前回経済局長の井上からもご説明させていただきましたが、やはり今後の厳しい行財政の中で、選択と集中というのが、これからは必ず求められると考えております。そういった中で、あらゆる分野の産業に対して、我々行政として取り組んでいく必要があると認識しておりますが、一方で選択と集中である特化した分野のエンジンの馬力を上げることによって、そこからつながるいろんな産業を活性化していくことができるのではないかとということで、3つ挙げております。1つ目が「北海道の1次産品を活かした食」ということで、食を一つのエンジンとして製造業など2次産業や3次産業の振興を図っていきたくて考えております。それから2つ目がものづくりということで、これは例えば食を中心とした加工、付加価値を高めると言った方がわかりやすいと思いますが、食の1次産品の付加価値を高めるものづくり、それからあえて広域都市圏ということで物流の拠点の小樽、苫小牧、千歳というのを入れさせていただいておりますが、特に苫小牧や、千歳といったところとのものづくりの連携によって札幌の消費が増えるというようなことがありますので、そういった意味でのものづくりといったことも、ここで盛り込んでいけるのではないかと考えております。そういう意味で、雇用創出効果が高く、産業連関の高いものづくりというのは非常に大きなエンジンになると考えております。それから3つ目が観光ということで、これは北海道・札幌にしかない資源を活用した観光ということで、これも大きなエンジンになると考えております。このエンジンの馬力を挙げることによって、北海道経済の底上げを図っていく、その役割を札幌が果たしていくといったことをここでまとめさせていただければと思っております。

以上、駆け足で大変恐縮ではございますけれども、「現状分析と全体構成(案)」ということをご説明させていただきました。

なお、「産業振興ビジョンの骨子(案)」というものもございますが、これは今ご説明させていただきました全体構成(案)のブレイクダウンと言いますか、記述させていただいたものでございまして、本日のご意見を頂戴した後、このビジョン骨子(案)をどんどん

肉付けしていきまして、ビジョンの完成に近づけていきたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。以上でございます。

小林会長 ありがとうございます。それでは、ただいま事務局から説明がありました内容につきまして、ご意見・ご質問をお聞かせいただきたいと思います。どなたからでも結構です。ございませんでしょうか。

三神委員 大変よく調べていただきまして、データ、資料もアンケート調査も大変適切な資料が出来上がったと感謝しています。

その現状を踏まえて色々で見させていただきましたけれども、思ったよりも北海道の産業は落ちている。支店経済と言うがそうではなく、全体にレベルダウンしてしまっている。あらゆるものが落ち込んでいるとまず感じたんですね。この「背景と必要性」という最初のところで、ここがもう少し現実的に反映されて良いのではないかと、柔らかく言うよりも厳しく捉えて書き直すくらいでないと、背景としては弱いような気がするわけですね。これが一つ問題あるということなのです。

それと関連してくるのが、第3章の「札幌市産業の目指す姿」なんですけれども、結局10年後にあるべき姿、どうあるかという書き方なのですが、色々データを出していただくと、角田課長が説明された中身以外に、特に私は生産性が気になるんですね。もちろん最後は市民1人あたりでやりましたけれども、産業の生産性が非常に弱いです。

それから開業と廃業の率ですね。開業はするんだけど廃業して開業が多くなる。持続する発展性に欠けると言いますか、こういうところに気をつけなければならないと思います。開業しても廃業してしまうので、結果的には4人以下の企業が増えてしまっているとか、9人以下の企業が多いとか。札幌の企業数、従業員数を見て、これが政令都市なのかと思ったのはここなのです。生まれてくるんだけど、成長していかないというところにてこを入れないと大変なことではないかなと思うのです。課長の説明がありましたけれども、私がそれ以外に感じたところです。

それでこの第3章の「札幌市産業の目指す姿」ですが10年ビジョンですから、札幌の10年後は若々しく生き生きとしているよというような、はつらつとした都市を作り上げるような感じで、作っておかないといけないのではないかなと思うんですね。これから働く方も若い方がどんどん減って、20歳から29歳まで本州へものすごい人数が行ってしまうわけですが、いずれにしてもそういう方々が働く場というものを創出しなければならないと思います。それから今の4人くらいでは後継者が生まれませんよね。自分の子どもに後継をさせていくというような企業を育てることが必要なのではないかなと思う。「生き生きとした」、「若々しい」、「積極果敢」など、こんなイメージをこの中にしっかりと根強く入れていくということが重要ではないかなと思います。それが札幌の10年後の産業というような形でやってもらったら良いと思います。下向きのままに現状を延長線でいったというだけの話ではビジョンにはならないのではないかな。ビジョンはあるべき姿ですから、ビジョ

ンを作ってそれを 10 年後こうあるべきだけれども、現状からいったらギャップがこれだけある、それを 10 年間のうちにどう埋めるか、ということがビジョンですから、そういうような形をこの中でとっていきようにしてほしいと思いました。

私が作成した文章を、事前に角田課長にはお渡ししましたが、ここでやるのは嫌ですので、参考にしていただけるようにして、みなさんの意見も入れていただいて、焼き直していただいて結構だと思います。主旨はそういうような形で、希望を持てるものにしていきたいと思っています。以上です。

小林会長 ありがとうございます。ただいまの文章にされたものがあるのですか。みなさんにお配りしていただければそれも参考にしてください。

三神委員 年寄りも生き生きと働く場を作りましょう。若い方、女の方がたくさん働ける場を作りましょうというようなことをこの中へ入れてみました。

小林会長 よろしいでしょうか。今の三神委員のように、こういう内容とか雰囲気をもっと打ち出してほしいとか、そういったご意見をどんどん出していただいて、それらを参考に、次のまとめに入れていくということになるかと思っています。

それから今の三神委員の発言の中で感じたことがあります。例えば第 1 章の「ビジョンの基本的な考え方」の中で、なぜこういうビジョンを作るかという「背景と必要性」のところでは、おそらく厳しい環境にあるということがまず前提としてあって、それがビジョンを描く一つの背景になっているということを描く面も持っている。たぶん今いただいた意見から言うと、札幌あるいは北海道を取り巻く状況の厳しさの原因の一つには、おそらく国内問題だけではなく、グローバルイゼーションという非常に世界的な大きな流れが否応なしに影響してきているという要因が、一つ指摘されるべき点なんだろうと思うんですね。そういった点、表面上の問題ではありますが、考慮されたいと思います。

それから 3 章の話は、積極的にもっと明るい雰囲気ですということをおっしゃられたわけですが、もう一つ先程データを分析した中で、非常に印象的であったということを描かれているんですが、それは開業率が高いがさらに廃業率が高い、したがって持続性がないということをおっしゃられたんですね。これは中小企業の振興ビジョンなのですが、ここで業種別に開業率、廃業率を見ると明らかに特色があると思うんですね。ビジョンではものづくりを重視しているわけですが、たぶんそのこととつながってくるのではないかと思います。開業しやすいような分野は非常にウェイトが高いのですが、同時に廃業率も高いので、そういう意味においては、安定的に持続的に発展していくためには、産業構造の面でも製造工業をはじめとするものづくりにエンジンの役割を担ってもらう必要があるということがつながってくるのではないかと思いますので、その辺も考慮していただければと思います。今三神委員のお話を伺いながら感じたところです。

他にいかがでしょうか。

大嶋委員 ただいま産業構造の説明をいただきまして、それから小林会長からのお話もありまして、札幌市の産業構造の特徴、それから開業・廃業、よく端的に表れております

ね。飲食関係ですとか小売関係が、開業も多いけれども廃業も多い。構造的にも構成比率が高いと。言ってみれば、現在の札幌市の産業構造をそのまま依存するというか持続した場合どうなるかということですね。ちょっと激しい言葉になるかもしれませんが、成熟産業に頼っているようでは、地域経済の活性化というのは望めないだろうと思います。そういう観点から、今回札幌市のビジョンの中にもものづくりをなんとかしなければならないというのが出ているわけで、まさにそういう観点が必要なのだろうと思います。したがって、この産業ビジョンを作る場合も、現状の札幌市の産業構造で将来良いのかどうか、言ってみれば成熟産業に依存していったら良いのか。一般的に成熟産業に依存する場合は、地域の活性化は望めないと言われているわけです。したがって、今後発展が望まれる先端産業的なものづくり的な産業を伸ばしていかない限りは、なかなか地域の活性化に及ばないというのが一般的な言われ方をしておりますが、今回のビジョン作りもそういう観点を踏まえてやるかどうか、意見の分かれるところではないかという感じを持っております。以上です。

小林会長 他にいかがでしょうか。

平野委員 今、開業と廃業のことが色々と言われておりますが、私ども日ごろからご相談を受けていると思うのですが、雇用が非常に厳しくなって離職される方が多いものから、そういう方の再度どこかに就職する場というのが、非常に北海道、特に札幌の場合は少ないわけです。そうすると仕方がなくて開業するという例も最近非常に増えてきておまして、きちんと見通しがなくて開業せざるを得ないという状況も増えてきているということです。そうすると、将来見通しがなくて開業されるわけですから、廃業される率も非常に高くなっています。

それからものづくりということで、基本的には北海道は製造業がないので、産業構造も弱くて、北海道から向こうへ転出される方が多いのは自然の成り行きというか、仕方ないのかなということで見えておりますが、これからものづくりは必要だと思います。ただものづくりされる場合には、色々資本と言うか、非常にお金がかかりますし、売り先といった販路を考えて組み立てていかなければならないので、そういうところをきちんと行政が主導するというのもちょっとおかしいですけども、ある程度ルートを作って誘導するというのも変なんですけれども、道筋を開いてあげればよいのではないかという気はいたします。

それからもう一点、食と観光です。ここで区別して記載されているのですが、実際には観光と食とを結びつけて製造業として一体化して誘導すると言うか、観光を就業の場として組み立てを考えてはどうかと考えます。例えばラーメンとかスイーツとか、北海道の食は全国的にも有名になってきています。特に札幌は、スイーツとか非常に有名になってきていますので、その辺もうちょっとさらに食と観光を結びつけた道筋の立て方と言うか、ビジョンを作ってはどうかと考えます。

小林会長 ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

清水委員 三神委員の提案がお手元に届いていると思いますけれども、これでやっと活力があると言うか、少しもやが晴れたような気がいたします。それと全体構成の新しい案を見せていただいて、特に6章のところ、これで本当に仏を作って魂を入れていく方向性ができたということが一つと、井上局長の方で何度かエンジンというお話をされましたけれども、その言葉を入れることによって点と線を結びつけていくことができた。それを面としていくためには、行政と我々中小企業が両輪で行くためには、ハイブリッドのように種類の異なるエンジンで効率よくビジョンに沿って活動をする。最終目標を意識しつつ前進することは、達成の度合いを確認し、状況によって微調整を行うこともできると思います。

それと、三神委員から老若男女というようなご説明をしていただきまして、まさしくその通りで、しかしながら特に女性という捉え方はデータをご覧になっておわかりになるように、女性が非常に多いのですけれども、それはおそらく女性の配偶者の方が道外に流出するとか、もともと女性は主婦として長生きするとか、色々な要素がございますが、集中して札幌に集まってくる波は抑えられないということを認識して、それにどう対策を立てていくか、ということがキーワードの一つではないかと思います。もちろん札幌もそうです。一つは高齢化の人に対してどう対応するか、先日もお話をさせていただいた通りに、未病の人、病気をしていない高齢者の方々にキーパーソンになっていただくと良いと思います。たとえば三神委員のような方にキーパーソンとして策定から運用まで関わっていただくことが重要だと思います。

札幌もまた高齢化を防ぐことは不可能ですが、地方の医療過疎が高齢者の札幌流入に拍車をかけ、一段と国保の財政を圧迫することにつながります。慢性疾患を抱えた高齢者は医療が充実している札幌に集中されつつありますが、事業を起こし雇用を促進し、納税の義務を果たそうというパワフルな高齢者の方々には、札幌市として何らかの仕掛けをしていく必要があると思います。札幌の経済を自立させ、ひいては北海道の未来をも視野に入れた示唆に富んだ牽引役ならしめることができるのは、北の大地で生き抜いてきた方々だからこそ期待を寄せることができると思います。

それからもう一つ、大英断をしていただかなければならないのは、行政の方というのは高学歴でしかも選ばれて、しかも専門的に仕事をしていらしている集団なわけですから、その方々が定年を迎えられた第二の人生設計をお考えの際は、是非ビジョン作りにご参加いただきたいと感じました。横滑りだとか天下りだとかもうそんなことを言っている時代ではなくて、本当に優秀な頭脳を縦糸とし、行政の方々は横糸となっていけることができたら、ぶれないものができるのではないかと考えております。

私どもが、これをこうしてほしいということをはんの少し申し上げただけで、今回お見せいただいた新しい全体構成、これで見事出来上がりつつあります。それにさらに三神委員の提案をしていただいたグローバル化とボーダレス化、確かにここに出ていると思います。最初に「背景と必要性」というところにきちっと出していただいた結果だと思います。

若々しい街づくりは絶対ありえないんですけれども、高齢者の方々にも参加していただいて、頭脳集団を札幌市の発展のために有効利用させていただくことができましたら、ドイツのマイスターよりも良いシステムが出来上がっていくと確信しています。次の時代のキーパーソンを育成していただきたいと思いますが、これは行政の力がなければ、実行不可能です。今までと同じようではなんとなく仲良しグループになってしまいます。そのようなもったいない方たちをたくさん存じ上げておりますので、その方々に、有効利用という言葉が適切ではないのですけれども、参加をしていただきたいと思うのです。金融機関なんかもそうですし、大企業になればなるほど60歳で定年を迎えます。残された時間は十分にあると思いますので、第二の人生という部分にも目を向けていただきたいと思います。以上でございます。

小林会長 ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

武田委員 今みなさまの意見を聞いておまして、私も色々と感じたことがありますので、話をさせていただきます。三神様がお作りいただいたこの「ビジョンの基本的な考え方」というところで、私もいいなというのはあります。それは一つですね、言葉として「グローバル化」というのが最初にきた。「ボーダレス化」というのもきた。「世界的なレベル」という言葉がきた。そして消費者としてはいつも願っております「安全・安心・環境負荷軽減志向」という言葉が先にきたのは非常に良かったなというふうに思います。

世界的なレベル、私も地方へ結構行く用事があるんですけれども、どこの街もさびしいです。人が歩いていません。たまに歩いていると高齢者だけなんですね。それで道内循環というのを先に持ってきて、これは人口が増えないので頭打ちだなというふうに思っております。ここはもうとにかく海外へというのを頭に入れていかなければならないのかな。あと10年もすれば、稚内は札幌へ来るよりはむしろサハリン・ロシアとつながりを持つのかなとか、新幹線ができれば函館の方は札幌へ来るよりは本州へ行った方が早いということで、それぞれいろんなところで動き始めるのかなというふうに思っています。

世界というふうに目を向けた時にいつも思うんですが、そこから利益を上げようということ为先に持ってくるのではなくて、これから変化していきます。日本は人口は減りますが、世界は年間1億人ずつ増えていくというふうに聞いております。地球も温暖化してきます。その中で何が求められるだろうか。私どもが何を提供できるだろうか、北海道としてどんなふうに役立っていけるだろうか。というふうに考えた時に、私は一つここに「水」という言葉がないのが非常に残念なんですけれども、前回配布された資料にはあるんですよね。この「ものづくり産業の現状と施策」という、(19)ページの「北海道が持つポテンシャル」という部分で、「雪氷・水」とあります。水というのは日本、世界でも誇れる北海道の非常に大切な資源ではないかと思っています。札幌の水も非常においしいです。天然水もたくさんある。これを水の不足する地域に出していったらどうかというふうに考えております。

それから先程の食と観光を結びつけてというお話がありました。観光といっても消費者

というのは非常に移り気です、常に工夫していかなければならないわけです。常に魅力として、引き付けておかなければならないものを考えなければなりません。そうすると一つは食であれば、食のグリーンツーリズム。農家に宿泊してもらってそこで農家のごはんを食べて、作物を見て印象付けて、そして近いという気持ちを持ってもらうことも必要なかなと思います。それからヘルシーツーリズムです。健康ということもあります。北海道には森が多い。そうすると森に来てもらう、そしてリフレッシュしてもらうとか、観光に結び付けてやっていけば良いのかなと思います。

それから女性が多い。女性は非常に力強いわけです、ただ製造業もできるんですけども、コミュニティビジネスとかこれから行政だけの力ではなく、民間もということだと、そういった方法でもいくらでも頑張れるのではないかというような気がいたします。北海道の風土や特性、人も資源ですので、「十二分に活用された新たな産業が創造され発展する」ということは、そこで満たされるというふうに考えます。

小林会長 よろしいですか。他にいかがでしょうか。色々なご意見が出されておりますが。

三神委員 ものづくりの方に関係することなのですが、大学の資料を出していただいたんですね。札幌周辺の大学の卒業生はどうなのかと、文系がものすごく多いように見えていたので、これは専門学校まで出した方が良くと思います。専門学校はだいたい技術系が入ってくるだろうと思うんですね。その辺になってくると卒業生がだいたい増えてきて、産業に役立つということが出てくるというふうに感じます。この辺のところを調べていただいて、データの中に入れていただけると助かるのではないかと思います。

小林会長 今三神さんがおっしゃられた卒業生の就職先、つまり道内と道外の比率を出せると思うんですね。文系と理系に分けて、高専を入れてみたら、たぶん道内に高専が4つあるんだけど、7～8割が出ているんじゃないですかね。地元残留率が2割くらいという状況ですから。

山下委員 正確かどうかわかりませんが、IT協会の方で4大と専門学校と工業系の卒業生は、だいたい5,000名強、6,000名弱だったと思います。そのうち道内の企業に就職している率が10～15%くらいで、残り85%は本州企業に就職しているという形で実績が出ています。

小林会長 ですから、やっぱりここでものづくりというところに非常に強いアクセントを置いているのは、いろんな理由が全部つながっているんですね。だから人口と流出、とりわけ20代の男性の流出が非常に高いというのは地域社会として非常に大きな問題なので、このビジョンというのは、骨格というか話の趣旨は中小企業の産業分野に力を入れようという話なんだけれども、それが結局北海道の地域社会全体の問題につながってくるわけです。そういうところでビジョンとしては焦点を絞って示そうとしているわけなんですけれども、究極的には北海道全体の話につながってくるということです。

何か他にございますか。今までの話で事務局は何かございますか。大変お褒めの言葉を

いただいているようです。優秀な人材をもっと活用しなさいということです。

事務局（渡辺産業振興部長） ありがとうございます。もちろん札幌・北海道につきましては、様々な方々がいらっしゃって、それぞれの分野で様々な活動をされて、様々なノウハウを持っている方がいらっしゃいます。優れた知見を持っていらっしゃる方がもちろん多ございますので、それは特定の分野ということに関わらず、キーマンというお話も出ましたけれども、そういった方々を我々は探し出して色々なアドバイスもいただきながら経済振興に役立てていくというのも考えていきたいというふうに思っておりますので、その辺も踏まえながらということで入れさせていただきます。

三神委員 わざわざものづくりを外したのか。ものづくり戦略があるからビジョンからは外したのですか。入れておいて展開していくということで良いと思うのですが。ITはあるんだけど、製造業がちょっと見えないですね。

事務局（渡辺産業振興部長） その件に関しては第5章の2の方の、札幌の「地域経済を牽引するエンジン」のものづくりの方に入れさせていただきます。1の方では先程説明したんですが、前はわかりづらい整理をしていたものから、そこを分野別に再整理をして構成し直しました。業種別という形では2番目で、特化した形でものづくり産業という形で入れさせていただきます。

三神委員 これからもものづくりの戦略を作るとは思うんですけども、ぜひ精密機械みたいな高度な科学技術分野ものづくりくらいのことを考えていただいて、ぜひ作っていただきたいと思います。

小林会長 よろしいでしょうか。他にいかがでしょうか。

池田副会長 私も今のみなさんのお話を聞いて、本当にこの札幌がもっともって活力が上がるようにしていく必要があると一経営者としても強く思いましたし、また立派な骨子を作っていただいたと思います。私はたまたま食品に携わっているものから、今のところ自分の経験の中で、食は勝てるかもわからないと捉えています。例えば、食の商品を作る時に、このところは他の国、他の県とも非常に優位性があるような気がしています。ただその時に使用する機械に至っては、ほぼ全敗だと私は感じるんですね。どんな時でも残念ながら、機械は本州から買わなければならないということになるわけです。そうすると、食産業の育成のためにやはりみなさん全員が力を合わせてもらって、そこで機械も購入できるような、もうちょっとビジョンより具体的なところに踏み込んだものがもう一枚加わると、もっと内容の濃いものになっていくんじゃないかなという気が非常にしております。

例えば、全国の食品で、たまたま私は流通の方に関わっているんですけども、スーパーさんの話になりますと、いろんな地域というのは地元のメーカーのものを意外と買っていたんですけども、北海道はその例外で、ほとんど本州志向というか、本州商品志向なんですね。それに対して、私たちメーカーは本州メーカーに近づく努力をしていくことが一番大事だということと、逆に実際に購買してくれるお客さん、小売業さんの方たちも

地元を応援するという意図がなければならない。このところをどうするかによってずいぶん違うと思います。

今はもう辞めましたけれど、先月まで道の身障者の委員をやっておりまして、地元の人たちは身障者の方に色々関わって協力したり応援したり、金銭的にも支援したりしていても、それはそれで関係ありません。一番おいしいところは本州の企業が一気に持っていく。例えば同じ商品レベルですと同じことだと思っただけです。ですから、そういうところを打破する強い意思を持った経営者を育てていく、そしてそれに賛同する若い郷土力を持った人材を育てていかなければなりません。そこにいかなければ、どんなにものづくりの話をして、いろんなことが出てきますけれども、もちろんボーダレス化もよく体験しています。これから何年かしたら、香港も日帰り、北京も日帰りの時代が来ます。だからそのための戦いをしなければなりません。そのためにはやはり協力する我々もレベルアップする、そういったことがどうしても必要になると思っただけです。その精神構造も含めてもう一つ入れるともっと力強い、反映されるビジョンになるというふうに捉えられるという気がしています。

長くなりましたけれども、この間どなたかにも言いましたけれども、高校生の集団面接をやりました。1,000人の子どもたちでした。私も高をくくっていたので、10人か20人かと思いましたが、3時間で二百何十名という生徒でした。私はとてもその後ろにいる親の姿を想像すると、面接なんかできる状態ではなかったです。私は経営者として本当に自分が悔しいです。この子どもたちを雇えないばかりに本州へ行ってしまうのか、と。だからものづくりをする時に我々経営者が実際に人を雇用する、それから本州メーカーとの質の戦いもする、そのためにどういう協力をし合えるかということをしっかりとお互いに確認し合わなければいけないと思うのです。そのことがビジョンの骨格に反映されることが一番大事だと。私は一人でもこのビジョンに立ち向かいたいという気持ちであります。以上です。

小林会長 どうもありがとうございました。

清水委員 すみません、平本先生、ご記憶にありませんか。条例作りをしている時に、3年くらい前だったと思うんですけども、この地産地消という言葉を使わずに、ぜひその北海道のものづくりでできたものを北海道で使おうじゃないかと、食品だけではなくてすべてのものです。業者も北海道の業者を使おうじゃないか、その推進役になるのはやっぱり行政だからということで、行政の方これも実践していただいていたような気がするんですね。

ですから私は前回の時に申し上げた通りに、やはり条例があって、その上に立つのが今回の振興ビジョンだというふうに思っておりますので、この辺の関係をもう一度私を含めてレクチャーしていただいたらありがたいのですが。

平本委員 まさに今清水さんがおっしゃった通りでして、3年前の中小企業振興条例の全面改訂に、私もお手伝いさせていただきました。

その中で今清水さんがおっしゃった通り、北海道で作ったものの一部分は北海道で積極的に使いましょう。食だけではなくて例えば紙にしてもそうですし、何にしても、行政がそれを率先してやりましょう。もちろん高いものを税金を使って全部買うわけにはいかないんですけれども、ある一定の部分に関しては、札幌市で作られたもの、道内で作られたものを率先して消費しましょうというような主旨のことが条例の中で謳われているんです。まさに今回の骨子、全体構成（案）の方にも謳われております通りで、ビジョンの位置づけとしては、「札幌市中小企業振興条例に基づく総合的な施策とする」というふうにありますので、まさに条例の持っております意味合いですとか、条例の理念をきちっと反映させたビジョンであるべきだというふうに思っております。

私もものづくり検討部会と申しまししょうか、そちらの方のメンバーでもありますし、そういうことも含めまして、今清水さんがご指摘くださったような地産地消と言いますか、積極的に北海道で作ったものを使う、ただ、ものは悪いんだけども我慢して使うということでは長続きしませんので、良いものをできれば低コストで作って、それを使うことでみんながハッピーになれるというようなことを検討したいと思います。すぐには無理だと思うんです。5年でできるかという、アクションプログラムの5年間の中で実現できることではないと思うんですけれども、そういった方向性をきちんと持った上で、ものづくりの方も検討していくということが必要なのではないかとこのように私自身も考えております。どうもありがとうございます。

三神委員 卸商連盟の活動について、今の地産地消ではないですが、道内の製造業と我々卸商連盟がやったことについて、実際に実績がすごく上がっていますから、ちょっと事例を言ってください。

事務局（木原産業振興課長） 経済局の産業振興課長の木原でございます。卸商連盟と言いますのは、札幌の卸業界の方々に入らせていただいている団体です。もう50年の歴史を持っているんですけれども、今年度新しい試みとしまして、北海道の隠れた産品、我々キラリ品と言っているんですけれども、北海道の隠れた産品を札幌の卸売業者の方の力を使って、北海道外に出していこうという試みを実施いたしました。

今まで卸商の方々というのは、東京のものを配電盤のように札幌に持ってきて、それを配電盤のように道内の各都市に持っていくという機能もあったのですが、意識して北海道の隠れた産品を、札幌の卸売の力を使って道外に持っていくという商談会を行いました。商談会には6ヶ月くらい時間をかけまして、全部で5,000件の電話をかけまして、道内の色々なメーカーから色々な産品を募集しまして、それを卸商の方々に見せて、こういう産品ならやりたいとか、もちろんメーカーもこういう方々に扱ってほしいというマッチングをいたしまして、全部で卸商の方が40数社、それから道内のメーカーの方が約210社、それでマッチングをしていただいたのが900件ですね。11月12日、13日にアクセスサッポロで行いまして、900件のマッチング、商談を15分刻みでやっていただいたところ、かなりのマッチングが実現されて、もうすでに道内の産品、食品が思った以上に多くて6割く

らいただいたんですが、その産品を道外に持っていくという事業が開始してございます。

それで11月12日、13日に行いまして、1ヶ月経たないうちに卸売の方に集まっていただきまして、今回の試みはどうだったか、これからもやれるだろうかという意思確認をしたところ、約4分の3くらいの卸売業の方が非常に良かった、来年以降も続けていきたいという感触を得たということでございまして、まだ予算も決まっていませんけれども、札幌市は来年もこのキラリ品の事業を行いたいと思って、今予算要求している途中でございます。

三神委員 一日のうちに14社面談をいたしました。そのうち11社が検討段階に入っていて、2社は完全に取引開始できます。あと他に6社くらいがほしい私たちが手をかければいけるなと思っています。2、3社については、パッケージから何から我々が手伝いをしてあげないとできないだろうなというような形です。そういう小さなメーカーさんなんですけれども、それを育てていかないと結局は大きくならないんです。組み立て、アイデアとしても良いけれども外見が悪いとか、いろんなものがありますから、その辺のところを我々は卸の販売に力を入れながら、作ったものをロットで作って我々が売るという形で、4、5本を少し提供させていただいて、数量で販売していくというドッキングをしたいと思っています。ものづくりは結果的には販売ができなければ何にもなりませんから。

それからもう一つですね、ある銀行さんが、九州のある県の銀行さんと食のフェアをやったんですね。私は直接その銀行さんの方に聞いたんですけど、北海道の方は売り方がしとやかで、九州の方に圧倒的に押されたらしいんですよ。結局良い商品なだけで売り込みが下手だということをおある銀行の方が言っておりました。この辺のところ、北海道の人の性格をしっかり直さないと、ものを売っていけないんじゃないかなという心配をしているわけですね。この北海道の風土の人情的なところは非常に良いことなんですけれども、商売の方は全国版ですから、やっぱり全国で挑戦をしていくということをすべての分野でやっていかなければならないのではないかと思います。以上です。

小林会長 ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

武田委員 今ビジネスマッチングの成功事例をお話伺わせていただいてよかったんですが、北洋銀行の柴田様にお伺いしてよろしいでしょうか。金融機関は平成15年くらいから地域密着型金融ということをやっていますよね。毎年、担保なしで融資とか、また海外とか道外とかも同じようにビジネスマッチングの場を作っていらっしゃるというふうに伺っておりますが、その辺のお話も聞かせていただければと思います。

柴田委員 北洋銀行の柴田です。ある銀行とはある銀行でございまして、私も直接は東京へ行っていませんけれども、話を聞いております。

まず、1つその感想からですけれども、これは異口同音に複数の方からその話を聞いていまして、良い物だから自信があるからそれほど工夫をしなくても、そこそこの値段でそこそこに売れると、これがたぶんずっと来た歴史じゃないかと思っています。お人好しと言う人もいますし、そういう意味で非常に北海道の人は良いも悪いもオープンな感じがあ

って、今後、いわゆるビジネスという意味ではまだまだそういう余地があると、逆に言う  
とそんな感じがしています。

お尋ねの金融機関の15年からという件ですが、確かに詳しいなと思っていますけれど  
も、企業市民と言いますか、金融機関も従来みたく金融という分野をもう少し大きく捉え  
て、地域密着型ということで、まさに地域経済の支えというよりも、今みたいなビジネス  
チャンスを作り上げていくということです。そういう金融システムをいわゆる大きい意味  
で言うと国民経済的と言うか、地域で言うと地域経済に活かしていくというのが御旗にあ  
りまして、金融機関の一番の特徴というのは、実は金融ではなくて情報にあると思ってい  
ます。これはおそらくすべての業種、それからすべての個人のお客様との取引があるわけ  
で、こういう業種というのはなかなか実はあまりなくて、それだけ情報を仲介できる1つ  
の役割の特徴を持っている。

その1つにビジネスマッチングというものがございまして、個別行として売込みをする  
わけじゃありませんけれども、今、東京・鹿児島を含めてそういう、これは九州と北海道  
という1つの南と北の架け橋ということでやっていますけれども、これが最近では中国とか  
ロシアとかだんだん北海道で言う地政学的な関係になる所へどんどん入りつつあるとい  
うのが実態でございます。年々、私どもの銀行だけではなくて、他の金融機関も含めて、ま  
さにこれが今、おそらく金融と二大柱になるぐらいに非常に大きな力となってやっている  
わけでございます。先程、三神さんからちょっとお話があったのは、その一環かなという  
ふうに思っております。おそらく今後も地域金融の金融と言う意味は、今みたいなビジネ  
スマッチングの機能を含めた捉え方を、今後していくのではないかと考えていまして、私  
どもとしては努力したいと思っています。

それからついでに1点だけ感想で、先程色々お話がありました通り、私も個人的には非  
常に良く全体構成を作り上げていただいたなと思っております。特に札幌の強みとか北海  
道の強みということが謳われておりますけれど、もう少し札幌人としてちょっとエゴを若  
干言わせていただくと、北海道における札幌の立ち位置と言いますか、機能の中心と言  
いますか、もっともっと北海道の牽引ということもあるんですけども、もう少し力強さ、  
パワーアップを出して、ポジションというものを強くアピールした方が市民だけの問題で  
はなく、北海道に良い影響を与えるのではないかとこのように思っております。連携  
とかという言葉よりもう少し強い、牽引よりももっと強いというような感想がありましたの  
で、もしご一考いただければと思っております。以上でございます。

小林会長 他にいかがでしょうか。

三箇委員 5章の「北海道・札幌の魅力を活かした観光」とあるんですけども、これ  
なんかもちょっと漠然としているなと思います。

この資料の中に札幌の見所がたくさんあるんですね。ところがみなさんこの中で自分と  
して何件回ったことがありますか。私はほとんどないんです。ですから、こういう資源が  
あっても活用されているのかどうかを考えるべきだと思います。

それと、私はたまにしかやらないんですが、パークゴルフというのは、これは北海道と九州は非常に盛んなのですが、関東ですとか中部の人はほとんどしません。たまたま取引先の関係で来た方が、「ゴルフだと時間がなくてできない」と、「じゃあ我々はパークゴルフをやるから、やってみませんか」ということでやりました。「これは非常に面白いね」とそういうような話も出てくるんですね。ですから、灯台下暗しと言うか、良い資源がたくさんあるんでしょうけれども、それがまだ活用されていないということです。

そういうことによって人が動けば、それだけ経済も活性化していくというようなことで、アピールをもっともっとしていったらどうかという感じも受けております。以上です。

小林会長 よろしいですか、今の話。何かコメントがありましたら。

パークゴルフというのは北海道発でしょう。だからまだ十分普及しきってないということでしょうね。

三箇委員 札幌では非常にたくさんあると思うんです。ですから、北海道の人達は、特に旭川ですとか名寄ですとか、雪の多いところの高年齢の人達は、したいんですけれどもできないということで、ビニールハウスを作ってその中でやっている人達もいるんです。それで飽き足らない人は、ほとんど九州へ行きます。そういうようなことをやることによって、非常にお互いの活性化につながっているなど。人的な交流ということは、それが取りも直さず特産物が売れるとか、いろんな経済効果も出でくるのではないかなという感じがします。

井上経済局長 経済局長の井上でございます。

ずいぶん観光の関係のお話が出ておまして、その通りだと思って聞いておりました。実は今回、アドバイザーをお願いしている方々からも非常に観光については厳しいご指摘がございます。特に沖縄が観光立県という上で非常に観光に力を入れている中で、これまで北海道・札幌は黙っていても人が来るというようなことで、ある意味様々な観光の組み合わせやシーズといったものの作り方が遅いと言うか、ないと言うことです。その中でも、今日お配りした19ページにもヘルシーツーリズムとかアートツーリズムとか書いてございますけれども、今、三箇さんもおっしゃっていましたが、本当にその資源を活かしきっているのか、個人的意見になるかもしれませんが、おそらくは活かしきっていない、まだまだ十分に活かせると思っているんですね。このビジョンを作っている中で、観光の部分は非常に大きな産業の柱になると思っていますので、まだまだ書き込みと言いますか、相当様々なものがこの中に書き込まれていくだろうと思っています。

先程食の話もありましたけれども、当然食も重要ですが、様々なものが実は観光と関係してきますので、観光部分の書き込みについても膨らましていきたいなと思っています。そのところは原案ができ次第、色々ご教示いただきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

それから池田さんから話がありましたように、本当にその通りでして、例えばIT企業で言いますと、大きなところは東京の方に行ってしまうんですね。ところがその他、例え

ば京都なんかは、本社は京都にずっと置いてあるんですよね。これは実は先程言いました郷土愛と言いますか、本当に教育の部分ですけれども、すごく大事な部分だと思っています。ただこのビジョンの中のどこで取り入れるかは深い部分になるので検討いたしますが、実はものすごく大事なベースになる部分だと思っています。

今後、一緒に頑張っていければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

小林会長 ありがとうございます。どうぞ。

小仲委員 私は先般、九州5箇所の視察研修に行って参りました。みなさんの中できつと6次産業という言葉をごんたか聞いたことがあると思うのですけれども、今の食・観光それから食材の加工に関する機械加工、そういったもの全部組み合わせて、1次産業・2次産業・3次産業が組み合わさった中での6次産業というのが、実際に九州などでは大きく実行されて、たくさんの人と消費とそういった実績を積まれてらっしゃるんですよね。ちなみに北海道でいえばアレフさんがそうなんですけれども、豊富な食材を活用して、それを加工する。加工する時には必ず機械がいる。機械の産業が発展する。そういった3つの物が組み合わさった6次産業というのを、このどこかに意識を深めて入れていただくと、たぶん方向性はそこになるんだと思うんです。

今、札幌の観光はたくさんあります。三箇さんがおっしゃるように、本当に点在しているだけで、まとまってブロックで見る所がない。みなさんにお尋ねします。観光でお知り合いが来て「札幌でどこか良いところない？どこか案内して」と言われた時に、あそこあそこ点でつないでご案内できる所はあるのでしょうか。実際は少ないんですよね。あそこが良い、ここが良い、北大、時計台は素敵な所です、芸術の森もあるということですが、あちこちに飛んでいてアクセスも悪いし、そういったまとめて構築されてお見せする、お客様にお越しいただき満足していただくというものが欠けているように思うんです。その辺のアドバイザー的な企画をなさる方がいらっしゃるのであれば、札幌市、広域都市も含めて、小樽などにもたくさん良いところがあると思います。長い歴史を持っている酒蔵、それから硝子工房、たくさんあるんですけれども、それを6次的に合わせた形での、集約した形での発展というのは少ないような気がするんです。目を向け、手を加えて、いろんな形での知識、それから知恵を集約した形での6次産業の構築というのは、今の時代だからすごく必要な気がするんです。

卵屋さんのココファームという所では、箱なしの10個でパックにしかなっていない物を、1日に200人と地元の方が買いに来るんです。土日ではその何倍もの人が集まってきました。その卵は、卵の加工だけではないんです。そこから出来るスイーツだとかお肉の加工だとかすべてやっている。そうすると雇用の創出がものすごく大きいのと、加工品を作る段階でやはり機械・設備、そういった物を投資並びに設置しなくてはならない。そういった組み合わさった産業構造というのは、北海道、特に札幌近辺にあるのでしょうか。そこにちょっと脚光を浴びて工夫を凝らしたら、6次産業、たくさんの産業が創出されると思います。

小林会長 はい、他によろしいでしょうか。いかがですか。

今おっしゃられた点というのは、大変前から指摘されている事だと思うんですね。ですから、こういう産業や素材がある。組み合わせの結果、どういうふうに攻めていくか、他の産業を育てていくかという所が弱い所だということは、北海道の産業を論ずる時にいつも指摘されてきた事だと思います。なかなか出来ないのは何故だろう、という所が一番難しい所で、わかりそうな事で難しい所なのでしょう。

小仲委員 それはきっと方向性の指導役が、行政なのか民間なのか分からないですが、方向性を司るような所が必要だと思うんです。叫ばれていて長らくやっても構築できない。今、会長がおっしゃったように、そこが議論の必要があるところなのではないかと。何か良い方策ができれば、きっと札幌市の産業ビジョンというものはもっと大きな膨らみがあるものになると思うのですが。

小林会長 その点は非常に大事な点で、実はそれを言い出せば、どこがリーダーシップを取るのかという話になって、それは業界なのか業界のリーダーたるべき組織なのか行政なのか、色々議論はあると思います。ただ、今の話のきっかけを作られたのは三箇さんですけれども、観光から話が始まったので、その点に関しては非常に問題・欠点をはっきりしていると思うんです。それは是非書いていただきたいと思います。

観光についてのアイデアを出した時にどこへ持っていったらいいのか、誰がリードするのか。観光協会というものがあるらしいけど、何をやっているのと言っては悪いのですが、どこかリードしていく組織が普通あるはずでしょうと思うのです。

三神委員 私、市役所改革市民会議の委員をやっている時、局全部と会いまして。そこで私は、「公共の交通機関を使って、個人で観光できるルートがあるんじゃないの、できないの？」と話をしたんですよ。そうしたら、あったんですよ。18 ぐらいあるのかな。これは北大生に安く作っていただいたと言っていました。「それをどこに置いているの？」と聞いたら、区役所に置いてあるということで「置いてあるだけじゃダメじゃないか」と話しました。「広報は広報でやっていますと言うけど、広報はどうするの？」と、こういう組立てなんですね。あるものを上手く活かして、それがみなさんに伝わっていれば、意外とある分があるんじゃないかなと。宝の持ち腐れでそのままになっているのではないかと思うのです。

確かあその後 JTB がその情報を知って、上手く観光ルートの PR に使わせてもらうというような事をやったはずですよ。だから、そういう業者とのドッキングが必要になってくるんだらうと思います。

小林会長 今、三神さんが言われた事から、いろんな事をやっているんだと思うんですね。それが上手く広報という面で良く伝わってないとか、十分利用されていないという部分もあるんだと思います。もう一つはそういったものがあるにはあるが、どこが一番責任を持ってリーダーシップを取って、組織化して引っ張っていくかということと2つ問題があるような気がしました。おそらく6章のビジョンの運用体制にも関係してくるんだと思う

んですけれどもぜひ色々考えていただきたいと思います。中小企業振興とか、ものづくり産業振興とかいうことを謳った時に、じゃあ具体的にどういうふうに後押ししていくのかという課題をよく聞きますね。そうすると色々な保護政策とか色々な行政上の支援政策がとられているんだと思うんです。ところが、例えばこういうことで申請すると補助金が出るとか、そういった類のものがたくさんあるんだと思うんですね。それは案外知らないとか利用されてないって事もあって、だから個々の政策というのは一杯あるんだけど、そこは昔から色々な工夫がなされて用意されているんだけど、案外有効に活用されてないということもあるに違いないので、その辺の所を、1つは広報・宣伝の問題かもしれないんだけど、もっと有効に組織的に使えるようなやり方が必要になってくると思います。そういうことで、産業振興ビジョンの全体を色々な角度からの色々なご意見が出ましたので、まとめが大変かと思うんですが、最終段階で出来るだけ活かしていただくように出来ればと思います。

三箇委員 もう1つ良いですか。

井上局長がエンジンと言われるんですけれども、誰がギアを入れ、誰がアクセルを踏むか、その所が一番大事ではないかと思います。ですから、行政の中でも、こういうビジョンを作りましたよ、ということがエンジンになるのではないかと思います。ところがその先なんですね。それをやはり札幌市としては、ちょっとよその行政と違った、ちょっと踏み込みを強くしてもらいたいなという感じもするわけです。以上です。

大嶋委員 前の審議会の時に申し上げたのですが、ただ作るだけではダメですと。これをいかにきちんとした形にしていくかということもお話したつもりですが、これはわかりやすく言うと、あとはトップのリーダーシップ如何だと私は思います。ですから札幌市長さんがこれを作って、いかにリードしていくかということです。実際にやるのは民間企業の方が主になると思います。企業の方に頑張っていただかなければならないのですが、ただ、札幌市のビジョンとして作った以上は、やはり札幌市長さんの強力なリーダーシップの下でやるべきだという考えを、この前申し上げたつもりです。そういう観点から言うと、ちょっと札幌市さんの具体的にやる内容について、遠慮しがちな書き方になっているので、ちょっと物足りないなと思うのです。それは「ビジョンの運用体制」の所に書くものなのか、それとも「中小企業の経営基盤の強化と創業促進」の所に、人材育成だとか創業経営アドバイスについて、市はこういう事をやって今後こういう事をやりますと書いてあるのですが、これがもう少し何か足りないような感じがしまして、それが気になっております。

小仲委員 すみません。今、皆さんのおっしゃった事全部含めて6次産業という言葉、中身をちょっと意識していただきたいなと思うんです。ぜひ、6次産業をよろしく願いいたします。内容は全部リンクしております。観光・食・製造、すべてリンクしておりますので、ぜひ、6次産業という言葉の意味合いを含めて意識をお願いしたいと思います。

三神委員 どこかに産学官・金融連携を入れてはどうでしょうか。例えば、これはエンジンの3つであって、産学官・金融でやらなかったら、結果的にはダメなんですね。やっ

ぱり産業と官庁の役所と学校と。産学官でそれに金融を入れて推進していくというのが1つあっても良いのかなという気がします。

事務局（渡辺産業振興部長） 金融という観点からは確かに、第5章の(3)にも入れておりますけれども、融資金融相談以外にも、おっしゃる通り色々な場面で、私ども札幌市とそれから道内の主要2行さんと連携協定を結んでおりまして、先程、北洋さんからもお話がありましたようなビジネスマッチングでありますとか、様々な連携活動をしております。したがって、そういった精神は当然ながら活かしながら、この中に盛り込んでいきたいと思っております。

清水委員 課題のところでもう1つご検討いただきたいのは、雇用の創出です。これは結果として、この全体構成が動き出した時には、雇用の創出が期待できると思うんですね。創出できた時にはどうするかという最終目的は、やはりこれは言いづらい聞きづらいでしょうけれども、札幌市の市民としては義務である納税をしていただき、税収の増加ということをぜひここで考えて、明確に出していかなければならないだろうと思うんですね。最終的に次にステップアップするためには、やはりお金が必要で、そのお金を得るためには私たち市民がきちんと税金を納める必要があると思います。ですから先程申し上げた通りに、高齢者の方がただのんびりしていただくのではなくて、頭脳集団としてもう一度働いていただいて、年金暮らしを安穩とするのではなく、札幌市民として持てる能力を發揮していただき、良い企業を興し、発展と繁栄をしていただき、結果として札幌の市民として納税していただき、さらには税収の増加も考えていただけたら良いと思います。整理をさせていただくと、雇用の創出＝税収の増加につながっていくだろうと思いますので、期待させていただきたいと思います。

小林会長 他にいかがでしょうか。よろしいですか。

平野委員 大変色々な有意義な意見を出していただいて、私も感心しながら聞いてはいたんですけども、施策はかなり色々打たれているんですが、やっぱりなかなかそれが一般の人達に理解してもらえていないのです。認知してもらうためにどうしたら良いかというのが、微妙な問題になるんですね。

例えば、北海道立食品加工研究センターなんて素晴らしいセンターが江別にあるんですけども、利用している人は何回も利用します。補助金でもそうです。利用する企業さんは、またかというくらい利用されるんだけど、あとで他の企業に聞いてみると、そんな制度があるの知らなかったというのが、本当に多い。いつまで経っても多い。それをどうしたら良いか、ぜひ皆さんもいろんなアイデアを出していただきたい。なんとかもっと一般の人達にもわかっていただけるような広報の仕方、ぜひ考えていただきたいというふうに思います。

小林会長 かなりたくさん意見が出たので、まとめはなかなか大変かと思いますが、せっかく良い意見がたくさん出ましたから、出来るだけこれを組み入れるようにしていただきたいと思います。

では、今後の審議のスケジュール等について事務局からお願いします。

事務局（渡辺産業振興部長） 今後のスケジュールでございますけれども、本日皆様からいただきました様々な有意義なご意見を基にして素案を作成しまして、来年3月を目途に審議会を開催させていただきまして、素案についてお諮りをさせていただきたいと考えております。

小林会長 そうすると、今日これが終わって、色々出た意見を来年3月の審議会に出す素案の中に盛り込むということですね。

事務局（渡辺産業振興部長） 左様でございます。ですので、先程説明した通り、本日お示ししているビジョンの案につきましては骨子でございますので、これにつきましては肉付けをさせていただきまして、今日いただいた意見の文書化を図りながら素案にしていきたいと思っております。

三神委員 資料の事前配布はありますか。

事務局（渡辺産業振興部長） 取りまとめの必要性に応じまして、適宜、委員の皆様にも事前に説明をし、またお諮りもしながら、まとめさせていただきたいと思っております。今日は非常に多岐に渡る、ある意味では網羅的なご意見をいただきました。やはり中小企業振興条例の精神にもあります通り、札幌市の責務ということももちろん謳われておりますが、基本的にはやはり中小企業者の皆様方の自らの創意工夫という事があって、それぞれの役割の中で相互に連携をし、補完し合いながら、札幌市の産業の活性化を図るという視点で、私どもとしてはまとめさせていただきたいと思っておりますので、その辺のところをご理解いただければと思います。

小林会長 本当に今日のご意見というのは誠に多岐に渡っております。札幌市に限定せず、北海道人の気質に関わる事まで話は広がりましたが、それはすべて関係あると思いません。しかし、ビジョン自体は札幌市の産業振興ビジョンということで、ある程度コンパクトにまとめられて出せるんだろうと思います。しかし、そういう中に、今日出た様々なご意見は、色々な形で反映するように工夫していただきたいと思います。

それでは、本日の審議会は以上とさせていただきます。

では、進行を事務局の方にお返しします。

### 3. 閉会

事務局（井上経済局長） それでは、長時間に渡りまして、ご審議ありがとうございました。様々なご意見をいただきまして、盛り込める分はなるべく盛り込みながらと思っておりますし、適宜、事前に見ていただく場面もおそらく出てくると思っておりますので、ひとつ今後ともよろしくお願ひしたいと思っております。

年末でございますので、皆様良いお年をお迎えください。本日は誠にありがとうございました。

以上